

「伊達マスク」がはずせない

風邪や花粉症のために手放せなかったマスクともお別れし、頬をなでるさわやかな風が心地よい季節。思いっきり深呼吸を…といきたいものですが、最近、若者を中心に、一年中マスクを付けるいわゆる「伊達マスク」の人が増えているのをご存じでしょうか？

もともとは風邪をひいた際、くしゃみやせきに伴う飛沫が周辺に拡散するのを防ぐ等、主にエチケットとして用いられてきたマスクですが、次第に流感や花粉、汚れた空気から、自分の身を守る道具としてもとらえられるようになってきました。

加えて、寒い時期には「顔が温かい」というのはもとより、「スッピンで出かけられる」など、その利便性もマスク人気の要因ですが、「伊達マスク」を付ける人には、「顔を隠すことで安心感が得られる」という理由が多いようです。

中には、もはや体の一部になっているような人もいて、極端な場合は、マスクをはずすと不安になり、呼吸困難になってしまう例もあるとか。

伊達マスクをはずせない心理には、「感情を人から読み取られたくない」「他人の視線が気になる」というように、他者とのコミュニケーションを避けようとする傾向が見られます。

携帯の画面から目を離さない、ずっとヘッドフォンを付けて外の音を遮断するなどと同様、マスクは、大勢の中にも人が関与してこない空間を確保してくれる「仮面」なのかもしれません。

ペルソナ社会の中で

仮面といえば、心理学者のユングは現代を「ペルソナ社会」と名付けています。ペルソナとは、古典劇で役者が用いた仮面をさし、パーソナリティーの語源でもあります。

ユングによれば、人は、社会的な役割によって、様々な顔を使い分けている、つまり仮面をかぶっていると言います。例えば家では父親であり、夫であり、会社では〇〇会社の部長というように、仮面の効用としては、それをかぶることで、自分自身を律し、社会的責任を果たすことに貢献できるという機能があります。

一方で、問題となるのは、その舞台を降りても、ペルソナをはずせないケースが多々あるということです。

退職しても会社の顔を引きずってしまい、なかなか地域社会に溶け込めない例や、親の期待に応えようと仮面をかぶり続けた子どもが耐えられなくなりキレルなどというのも、ペルソナ社会の負の部分といえます。

さらに日本社会では「本音と建て前」や「根回し」などということばがあるように、事を荒立てずに物事を進める慣習があるため、仮面をはずすきっかけを逸してしまいがちです。

若い人がマスクをかなぐり捨てて、自分の考えを自由に主張できるようになるためにも、まずは人生の先輩たちが、時には仮面をはずし、オープンなコミュニティーの場を構築することは、とても意義深いことといえるのではないのでしょうか。

記 宮島佳代子